たまきずクロスオーバー（ヒース君の場合）

0と1の間には、暗くて深い溝がある

藤沢みや（miya）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=23045807

ヒュンマ, たまきず

2024/9/21 ~ の「KZN48 -Tertius-」に合わせた小話です。
・きずゆうくんと、ヒュンマちゃんの子供視点です。
・たまきずの勇者くんはヒュンマちゃんの子で、ラーハルトの弟子という設定がありました。それをフォローしたお話です。
・たまきず組からのお話のつもりが、あちらこちらと両視点になりました。
・ラーハルトとダイ君が出てきます。
illust/106766779
illust/106751849
ビジュアルはこんな感じ。
妹ちゃんは出てこないです。
苺はほぼ関係ありませんが、可愛かったので表紙絵で採用です(笑)

0と1の間には、暗くて深い溝がある

「0と1の間には、暗くて深い溝がある」

　ゼパロの言葉に首を傾げた。

○●○

　ボクは、この世界に勇者として作られた。
　けれども、0から作り上げるのは難しいため、ある世界の未来の子供を素に作られたらしい。
　無から有を作り出すのはそうとう難しいらしい。
　よくわからない。

　子供と大人、少年と青年の狭間。やや子供寄り。
　そんなボクは、ある世界から心強い仲間を呼んで、一緒に戦うことができた。

　兄弟ってこんな感じ？
　お姉さんってこんな感じ？
　お姉さんの彼氏ってこんな感じ？

　新しい人が増える度に、ボクは新しい感情を手に入れる。

　そして、いろいろな感情と思い出を手に入れて、ボクはみんなとお別れをした。

「ヒース、水だ。水が媒介で、あちらのお前に会えるぞ！」
　ある日、ゼパロが騒ぎ出した。彼が訳のわからないことを言うのはよくあることで、ボクはすっかりと聞き流す癖が付いていた。
「へ～」
「……へ～って、反応が薄いな」
　ゼパロは口を突き出してむぅっとした表情を浮かべる。
「だって、みんなボク達のこと覚えていないんだよ？」
　余計、淋しいだけじゃないか。
　口にしなかった言葉を感じ取ったのか、ピラちゃんが困ったように眉を寄せた。
　助けてくれた。
　楽しかった。
　彼らは、きっとあちらの世界で元気でやっている。

　その中に、ボクは入れない。

　見たところで、淋しいだけじゃないか。

　ゼパロは、機会があれば逃さずにあちらと交流を持とうとしているらしい。
　あちらのボクとは、ちょこっとだけ話をしたともいう。
　ふーん。

　なんだか面白くないな。
　ボクは、すっかりとやさぐれていた。
　あちらのボクと目が合えば、手を振り返すくらいはするけれど。

　ピラちゃんとゼパロがあちらと細々と交流をしている間、ボクは遠くから見やるだけ。

そんな時、ラーハルトさんの槍の舞が目に止まる。
　無意識に槍を手にしていて、剣のが殺傷力があるとわかっていてもなかなか変えられなくて……
　小さな頃に見た、綺麗な、綺麗な、槍の舞。
　風が舞うような美しい演舞。
　これは、ボクの思い出じゃない。

　今、あちらのボクはラーハルトさんと一緒に旅をしていた。

　……ボクだって、ラーハルトさんと旅をしてみたかった。
　そう思って、ああ、これが『嫉妬』なんだと気が付く。
　ボクは苦く笑って、槍の手入れを再開した。

☆:;;;:*☆**☆*:;;;:*☆**☆*:;;;:*☆**☆*

　時は遡って、ミラドシアでの戦いの日々。

「……バラン様、ダイ様」
　走るのが遅れてみんなの背中を見つめていると、小さな声が耳に届いた。
　竜魔人のまま駆けるバランとダイの背中を見つめて、ラーハルトは目を細めた。今にも彼は泣きそうだ。

　見てしまった。

　ヒースは、すっと顔を逸らして見なかった振りをする。
　よくわからない感情だけれど、見てはいけないものを見てしまったという感覚がある。

とてつもなくある。
　気まずいっていうのは、こういう感情のことをいうのだろう。

　大人になった人は、人に涙を見せたがらないという。
　なんだかよくわからないけれど、そういうものらしい。
　クロコダインさんからいろいろ教わった。

　男の矜持は、決して軽くて見てはいけない。

　へー、そうなんだ～としか、まだ思えなかった。

☆:;;;;:*☆**☆*:;;;;:*☆**☆*:;;;;:*☆**☆*

　槍を磨きながら、ラーハルトさんの目を思い出す。
　とてもとても大切な、大事な人達の背中を見つめる目。
　二度と手に入らない、とってとっても大切な宝物を見つめる目。

　すとん、と胸に落ちる。

　ラーハルトさん、一緒だね。

　二度と手に入らない、大事な日々。

　ボクは、槍を置いて、よくわからないけれど両手を合わせ、目を閉じる。

　――――　あちらのラーハルトさんが、大事な二人の後ろ姿を思い

出せますように……
　一緒にご飯を食べた日々。
　些細な約束を交わす日々。
　父と弟に混じって走った日々。
　そんな日々を、思い出せますように……

　あちらのラーハルトさんにとっては偽物の思い出だけど、でも、こちらでは真実だったのだから。

「ヒース？」
「ちょっ！！？？　ヒース？？？」
　なんとなく祈っていたら、ゼパロとピラちゃんが騒いでいた。
　顔を上げて、目を開けると眩しくてまた目を閉じる。

『師匠、師匠！？　大丈夫っ？』
　あちらのボクが慌てる声が聞こえた。
　水面を見れば、ラーハルトさんが呆然と目を見開いて滂沱（ぼうだ）していた。

『……バラン様、ダイ様』
『ラーハルト、ヒース！　遊びに来た～……え……っ痛！　とう、さん？』

　ボクは慌てて水面の近くに駆け寄った。
　あちらの世界には、ボクの素の『あちらのヒース君』とラーハルトさん、そしてなぜか大きくなったダイがいた。
　水面の向こうの二人と目が合う。
　ラーハルトさんとダイは、ボクを見て目を見開いた。

ボクは、ボクが言うべき言葉を見つける。

「夢じゃ、ないよ」

　そして笑った。

　あちらと、こちらがちょっとだけ繋がった。

　淋しさはなくならないけれど、なんだか、どうでもよくなっちゃった。
　ボクの旅の仲間は、ゼパロとピラちゃんだ。
　あちらのみんなとは、もう旅をすることはないだろうけれど、あちらのボクが楽しく旅をしていれば、それでいい。

　あちらのダイが、真っ直ぐボクを見た。
『ミラドシアのヒース、お久し振り。元気だった？』
　にかっと笑って、ダイが手を振ってくる。
　目にはちょっとだけ涙。
「うん、ダイ。元気だよ」
　あちらの人が、ボクを覚えていた。
　ボクも泣きそうだ。
『こっちでね、よく話題にするんだよ。みんなはっきりと覚えてはいないけれど、ヒュンケルもマァムもスイカのこと、覚えてた』
　ああ、あの大きなスイカか。
「大きい割には大味じゃなかったよね。おいしかったし、楽しかった！」
『うん、楽しかったね。ヒース、また遊ぼう』

嘘じゃない。
　現実になるかわからないけれど、ダイは本気でそう思っている。
　だから、ボクも本気で答える。
「うん、また！」
　ちゃんと笑えたよ。
『ヒース』
　ラーハルトさんのやさしい声。
「ラーハルトさん」
　ボクの呼び掛けに、彼はふっと息を吐き出した。
『四人で走ったこと、今度は忘れないからな』
　ふにゃっとまではいかないけれど、幼い感じで笑うラーハルトさん。
　格好良くてかわいくて、さすがあちらのボクの師匠！！！
　もう、ボクも師匠と呼ぼう。
「師匠！！　思い出せてもらえて、嬉しいです！！　ダイもありがとう！！」
『……なぜ、お前まで師匠と呼ぶ……』
『いいなぁ、ラーハルト』
　ちょっと距離が近付いたような二人にボクはニコニコしちゃう。
　そして、背後の向こうのボクがちょっと不機嫌で、なんだか笑ってしまった。
　ボク達は、お互いに相手を羨んでいるのかもしれない。

　お互いに無い物ねだりの、贅沢者だ。

「あ……」
『あ……』

　ボクと、あちらのボクが同時に声を上げる。

　そして繋がりが消えた。

「ヒース？」
　隣で、ゼパロが心配そうにボクを覗いていた。
「繋がり？　が、切れちゃったみたい」
「……ああ……えーと、大丈夫か？」
　彼は、誰かを心配したりすることに慣れていない。でも、心配をしてくれているのは表情からも声音からもわかる。
「うーーん、たぶん？」
　首を傾げれば、ゼパロは目を開いて、そして苦笑う。
「体調は？」
「それは大丈夫」
　ボクが笑えば、ピラちゃんが頭頂部にへばりついて泣いていた。
「泣くなよ、ピラちゃん」
　ピラちゃんは、けっこう長い間、泣き止まなかった。

○●○

「0と1の間には、暗くて深い溝がある」
　ゼパロの言葉にボクは首を傾げた。
「あちらとこちらは、完全に離れているわけじゃなくて『ヒース』という一欠片（ひとかけら）があることによって、繋がるのだろう」
「ふーん」
　ボクは消えてしまった火を熾すことに夢中で、彼の話を適当に聞き流した。
　ごめん、ボクは脳筋かもしれない。

難しい話、わからない。

　よくわからないけれど、思い出して欲しいなって思ったら、こちらのことを思い出した人がいた。
　そういうことだろう。
「ヒース、これはもっと深く考察をすべき事態だ」「ねえ、昨日手に入れた卵、食べちゃおうよ」「……え？」
　ゼパロが、深く考察だかなんだかし始める前に声を掛ける。
　ラーハルトさんが、こちらで大事な人との思い出を思い出した。
　それだけで、いいじゃないか。
　0とか1とかよくわからない。
「ゼパロ。よかったね、だけじゃダメなの？」
　彼に聞けば、ゼパロは目を見開いて、そして天を見上げた。
「ダメじゃ、ない……な」
「とりあえず、ご飯作って食べて寝よう？」
「……ああ、そうするか」
　ボク達は、のんびりとご飯の用意を始めた。

　胸は、まだぽかぽかしていた。

○●○

　繋がりが消えてから、ラーハルトはなにも映らない水面を見つめて、そしてダイを見やる。
「ダイ様……」
「ラーハルトも、思い出した？」
「はい。お二人の共闘……胸が熱くなりました」
「きょーとー？」

ヒースが首を傾げる。
　そんなヒースを見て、ダイは笑う。
「レオナから差し入れ預かってきたんだ。なんかお肉多めのサンドウィッチって言ってた。ご飯食べながら……オレ達の父親の話、聞いて欲しいな」
　ダイの言葉に、ヒースは破顔する。

「うん。話を、聞かせて」

おしまい